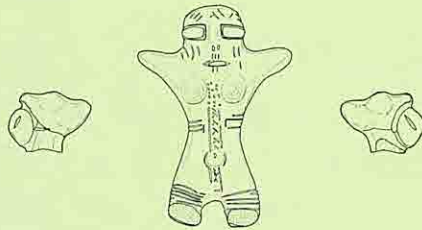
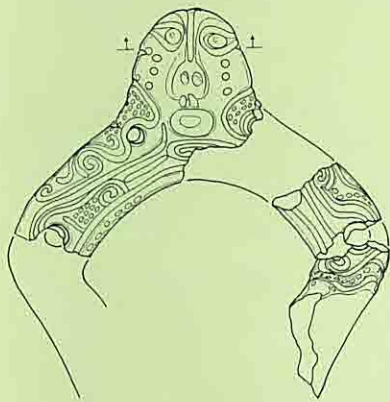


多摩ニュータウン
No. 72 遺跡
～縄文のムラ～



はじめに

本遺跡を含む多摩ニュータウン遺跡群は、多摩ニュータウン開発事業区域内において発見・調査された遺跡の総称です。旧石器時代～近・現代までの様々な時代の遺跡が964ヶ所確認されています。多摩ニュータウン遺跡群は、稲城・多摩・八王子・町田の4市にまたがり、東西14km・南北2～4kmの細長い範囲（約3,000ha）に展開しています。

No.72遺跡は、多摩ニュータウン遺跡群の中央北寄り、多摩川支流の大栗川中流左岸に位置し、南側の大栗川、北側の寺沢川に挟まれた台地状の平坦面とその周囲（No.796遺跡）に立地しています。標高は台地上で100～90m、その下で90～85m、面積は約80,000㎡の範囲に及びます。

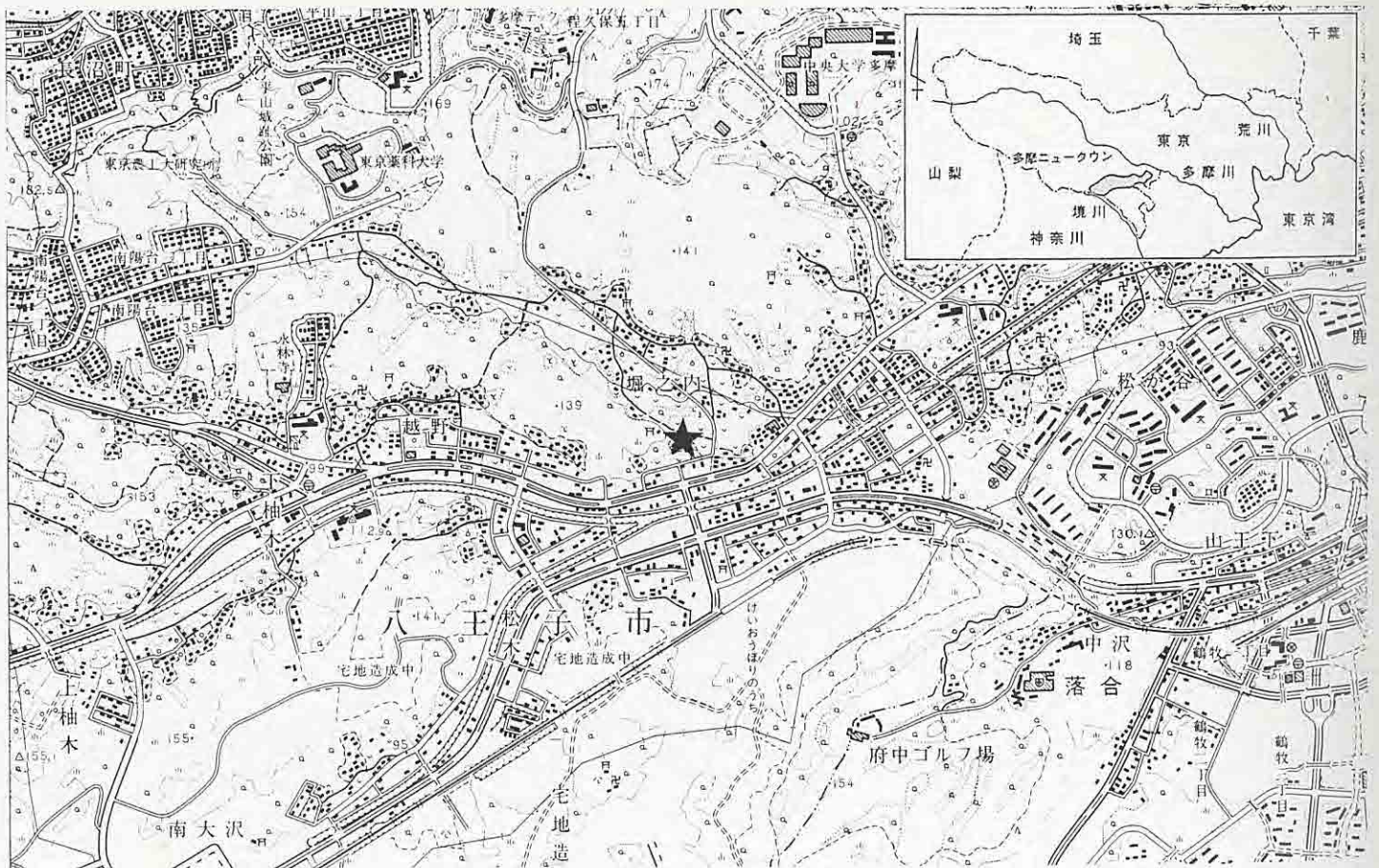
発掘調査の経過

本遺跡の調査は、No.72遺跡が1987（昭和62）年～2000（平成12）年にかけて8回、No.796遺跡は1981（昭和56）年～1990（平成2）年にかけて7回、計15回実施されました。公園として保存された中央部分を除き、台地とその周囲のほぼ全域を調査しました。

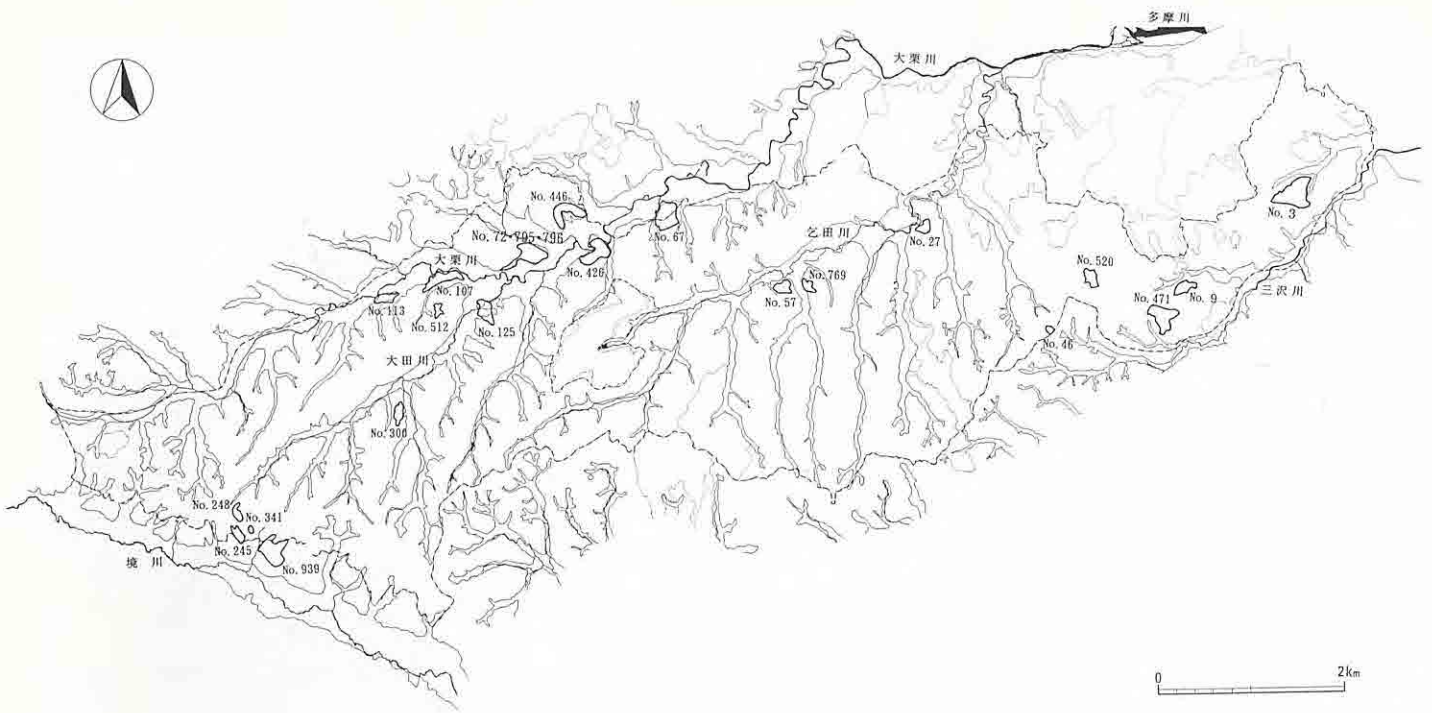
調査の成果

発掘で見つかった遺構・遺物は旧石器時代～近代まで多種多様です。主なものは、旧石器時代では石斧の製作跡、縄文時代の初め（草創期）の土器、古代では40軒以上の住居跡と水田（中世以降～現代まで続く）、近代では明治期の学校跡などが発見されました。

今回、ここに紹介するのは縄文時代の集落（ムラ）です。前期（約6,000年前）の住居跡が17軒、中期（約4,800～4,000年前）の住居跡が275軒、発見されました。多摩ニュータウン地域はもちろん全国的にも有数の規模をもつ遺跡です。



遺跡の位置



多摩ニュータウン地域の縄文時代主要遺跡の分布

多摩ニュータウン内の縄文時代の主な“ムラ”は、稲城市の三沢川、多摩市の乞田川、八王子市の大栗川、町田市の境川の各流域にまよります。それらの中でもNo.72遺跡は突出した大規模なムラで、多摩ニュータウン内のみならず、地域の中核として存在していたことが窺えます。



No.72遺跡遠景（東側より望む）

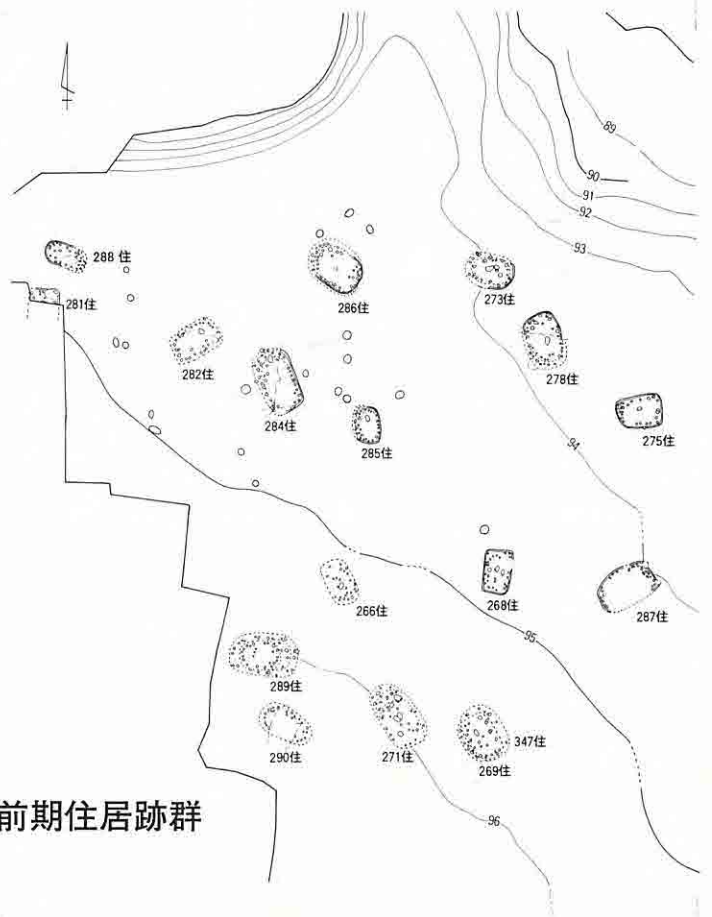
No.72 遺跡で発見された縄文時代の遺構は、前期では住居跡 17、墓と思われる土坑 19 基、中期では、住居跡 275 軒、建物跡 18 棟、墓塚 140 基、埋甕 33 基、配石 8 基などの他、集石（石蒸し料理用施設）、陥穴（動物を生け捕る穴）があります。この時期以外では、草創期の土坑、早期～前期の集石、炉穴（屋外の炉）、陥穴が多数みつかっています。居住の場（ムラ）として利用していた時期以外でも狩りの場などとしてこの地が長い間利用されてきたことがわかります。

この地は、南北に川を望み、すぐ西側には豊かな森林を有し、日当たり・水捌けは良好、現代の不動産広告にも通じる最高の条件が整った土地であったと言えるでしょう。



前期の住居跡は、大地の奥半に集中します。それらの配置をみると、大きく南北のグループに分かれます。そして中央東西の空白部分を軸として各住居跡が対照位置に並んでいるのです。又、墓と思われる土坑は、北のグループの住居近くに集まり、南のグループにはほとんど見られないという特徴があります。住居の形は、長方形・楕円形が主で、柱の穴は壁沿いに巡っています。

この時期（前期の初め）の住居跡がこれほど纏まって見つかったのは多摩ニュータウンを含む東京近郊では初めてであり、当時の社会を解明していく上で貴重な資料となります。



前期住居跡群



268号住居跡



284号住居跡



286号住居跡



285号住居跡



269・347号住居跡
(中期の住居跡と重複)



275号住居跡



273号住居跡



288号住居跡

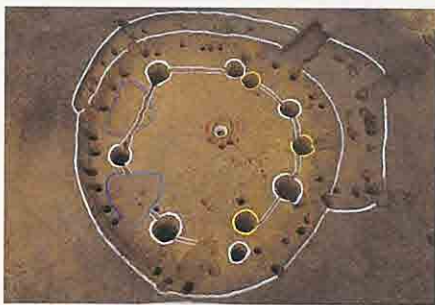


278号住居跡

中期のムラの特徴としては、住居が環状に巡り、その内側に倉庫と思われる建物、墓地が設けられ、中央部は広場となっています。No.72 遺跡では東西 200 m、南北 90 m の範囲に楕円形に住居が巡っています。時期が古いものは外側、そして新しくなるにつれ内側に造られるようになります。住居の形は、円形・隅が丸い方形がもっとも多く、直径 3～6 m の大きさです。中には 7 m を超える大きなもの、2 m の小さいものもあります。柱は前期と違って太いものを 4～6 本立てます。ほとんどの住居はこの柱穴が重なって見つかり、住居の建て替えが行われたと考えられます。



中期住居跡群



前期（長方形）・中期（円形）の住居跡の重複



建て替えられた住居跡



石棒が出土した住居跡



ムラ最大と最小（手前左の方形）住居跡



大量の土器が棄てられた住居跡





柄鏡形敷石住居跡（石を敷き詰めた床・入口が柄のように突出している）（中期末～後期初頭）
 中期の終わり頃の住居です。No.72 遺跡でも 20 軒以上の敷石住居跡が見つっています。



高床式の建物で、柱穴が規則的に並んで見つけられます。18 棟が確認されました。

建物跡（倉庫？）の柱穴



墓の一種です。遺骨を納めた容器を穴に入れ、その上に大きな甕を逆さに被せます。



伏甕（骨容器に被せている）

墓壙群



礫を充填した墓

ムラの墓地は、中期前半ではやや外側にブロック状に集中します。中期後半ではムラの内側にまとまり、さらに中央部に環状墓地が形成されます。



土器を被せた墓



土器片を充填した墓

集石（石蒸し料理用施設）



屋外に設けられた調理用施設です。石を熱して食べ物を蒸し焼きにします。縄文時代全般に見られますが、中期のムラには必ずといってよいほど発見されます。



石を半分取り上げた状態

陥穴（動物を生け捕る穴）



中期の超大形陥穴
 （手前右が早期の陥穴）

No.72 のムラでは西側の端に大形の陥穴が幾つも列をなして見つかりました。動物からムラ（人・食料）を守るためでしょうか。

No.72 遺跡の全景 (航空写真)



右側の写真が第1次調査（1987～89年）、左側が第8次調査（2000～01年）の全景です。左側が山、右側は川沿いの低地になります。白線で囲まれた左右の住居跡群の間に残る緑地は公園として保存・整備されています。



No.72遺跡から出土した土器は総数で100万点を超えています。形が復元できたものも1000点以上あります。出土する場所は、各住居が廃絶された後の窪みに捨てられたもの、ムラの端の一角にある現代でいうゴミ捨て場が設けられ、そこに捨てられたもの、などです。中期のムラが続いた約800年間の残照とでもいいでしょうか。

ムラの中でも最も古い段階の住居跡です。大半は住居廃絶から程なくして捨てられたものですが、手前左から二番目の土器は、住居が廃棄され柱を抜き去った跡に柱穴に埋め込まれたものです。住居の廃絶の際に何かの儀式を行ったのでしょうか。



19号住居跡出土土器 中期前半（勝坂1式）



46号住居跡出土土器 中期前半（勝坂2式）

ムラの東端にある住居跡です。この地域の土器である勝坂式に混じって、東関東地域に分布する阿玉台式土器が出土しました。千葉・茨城方面との交流を物語る資料です。人体・動物をモチーフにした土器が多くみられます。

46号住居跡と同じく東端にあります。縦長の窓のような区画が繰り返されるもの、蛇を模った土器が多くみられます。阿玉台式土器、浅鉢も出土しました。



56号住居跡出土土器 中期前半（勝坂2式）



61号住居跡出土土器 中期後半（加曾利E1式）

中期のムラの歴史の中でほぼ中間地点の時期です。この地域に主体的な加曾利E式土器に混じって、山梨・長野県に分布する曾利式土器、東北地方に分布する大木式土器が出土しています。

中期のムラの歴史も後半に入っています。この住居跡から出土した土器の多くは曾利式の影響を受けてその文様・形を取り入れて作られたものです。この時期はこのような土器が数多くみられます。



94号住居跡出土土器 中期後半（加曾利E3式）

—遠くから来た土器—

No.72遺跡からは本州各地から運ばれてきた土器が出土しています。北から、東北地方（福島県会津・中通り）、栃木県、茨城・千葉県、長野・山梨県、静岡・愛知県、近畿地方、の各地です。これらは土器を運ぶ人間や土器の中味？とともに来たものであり、そこに当時の活発な交流の一端が窺えます。



東海地方の土器（中富V式）
加曾利E2式の土器と出土

写真の2点はほぼ完全に近い形に復元できたもので、多摩ニュータウンでは殆ど見られない貴重な資料です。



東北地方の土器（大木8a式）勝坂3式の土器と出土

縄文土器には様々な文様が描かれています。煮炊き・貯蔵・盛り付けなど、日用品ともいえる器に華美なほどの装飾文様を施す理由とは何でしょうか？ 非常に企画的な文様を整然と繰り返す、何かを模ったもの（かたど）を描き、あたかも物語が展開しているかのようなもの、など現代の我々の目からみると不可思議な世界が広がっています。この文様を読み解くことによって縄文人の精神世界（かいま）の一端を見ることが出来るかも知れません。



抽象化した蛇体文十人
体文（蹲踞姿勢・顔なし）
が2単位
蛇と人との組み合わせ
はよく見られる構成

抽象化した人体文
（バンザイ姿勢？）
3単位とも文様を変えて
いる



蛇体文が対称位置に一对（雌雄？）
頭部（把手）・腹・尻尾の形状・
大きさなどが違う



さんしょうお
山椒魚文（正体不明の生物！）
2単位で雄雌一対？
微妙に形状が違う

半円文が4単位
一箇所だけ縦線が入る
口縁部の逆U字文に対応
—土器の正面？



把手から垂下する渦巻文が5単位整然と配置しているが、よく見ると部分的に文様を変えているところがある

整然とした区画の中に渦巻文（上が4、下が8）が規則的に並ぶ



No.72 遺跡からは土器の他に様々な遺物が出土しています。石器・土製品・石製品などです。ここでは主に変わり種の土器・土製品・装身具（アクセサリー）を紹介します。

多種多様な土器の中には、人間の顔を模ったものが見られます。煮炊き用の深鉢の縁に土偶（人を模った土人形）を貼り付けたもの、有孔鏝付土器（酒造りの道具）の胴部に顔面を貼り付けたもの、釣手土器（ランプ）の把手部分が人面となっているもの、など極めて珍しい土器が見つっています。

土製品とは粘土で作った土器以外のものの総称です。日常生活での実用品（土錘つば—漁撈用網のおもり錘など）、装飾品、祭り・儀式に使われたと考えられる道具などがあります。装飾品には耳飾り（耳栓—ピアスけつじょう・挟状耳飾—イヤリング）などがあり、祭りの道具として、ミニチュア土器・三角柱状土製品・土偶・土鈴などがあります。

さらに石を素材にした装身具も見つっていますが、特筆すべきものとして硬玉製大珠（ヒスイの垂れ飾り—ペンダント）があります。硬玉（ヒスイ）は新潟・富山県の産地から運ばれてくる当時としても大変貴重なものです。No.72 遺跡からは4点が出土しており、その事をもってしてもこのムラが地域の重要な拠点であったことが窺えます。





有孔鏝付土器の胴部に
貼り付けられた顔面装飾



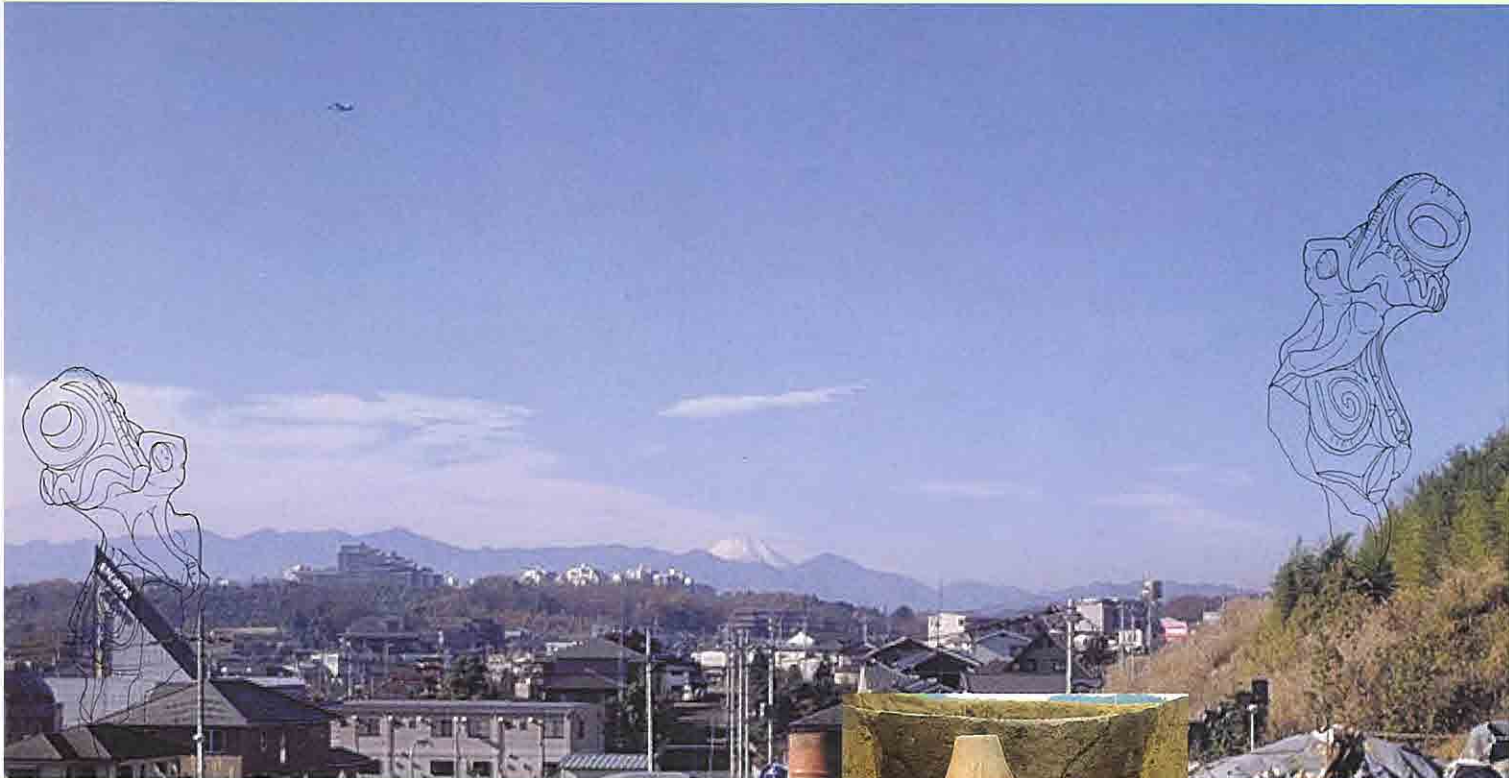
人面・人体を模った釣手土器



1cmほどの土偶の頭部
日本でも最小クラス

硬玉製太珠（ヒスイ） 一つのムラから4点も出土するのは大変珍しい。





編集 財団法人東京都スポーツ文化事業団
東京都埋蔵文化財センター

発行 東京都立埋蔵文化財調査センター
東京都多摩市落合1-14-2
TEL 042 (373) 5296

印刷 スズキ美術印刷株式会社
東京都八王子市南町9-8
TEL 042 (626) 2600
